



シュテファン・ツヴァイクの悲劇(上)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 砂原, 教男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004635

シュテファン・ツヴァイクの悲劇(上)

砂原教男

オーストリア・ウィーンで生れ、ウィーンを愛しながら、ナチスに追われ、イギリス、アメリカと亡命生活を送り、第二次大戦中の一九四二年、シンガポール陥落の直後ブラジル・ペトロポリスで服毒自殺を遂げたシュテファン・ツヴァイクに対する評価は文学の世界では余り高くないようである。⁽¹⁾ 岩波文庫の目録を見ても『マリー・アントワネット』『マリー・ステュアルト』という小説というよりは評伝といふべきものが収載されているが、ツヴァイクの作品としてはもっと数の多い小説(短篇も長篇も)はかつては角川文庫に数冊あったが、今はもうどの文庫にも収められていない。⁽²⁾ 日本ではツヴァイクは小説家としてはもう認められてはいないらしい。

もっと奇妙なのは、今回この論文を書くために友人のゲルマニストにもたずけてもらってツヴァイクを扱った日本人学者の論文を探したがほとんど見当たらないことである。恐らく日本には何百人かのゲルマニストがおられるのに、ツヴァイクの関する論文を書く人

がいないということは、すくなくとも、現在の日本ではもうツヴァイクは文学の対象になるべき作家とは認められていないことを意味していると考えてよいだろう。

しかし、彼は忘れ去られるにしては勿体ない作家だと思う。聞くところによればウィーンにはツヴァイク資料館(Siegan Zweig-Archiv)があつて活躍しているようだが、日本では飯塚信雄教授以外にはまごまごした研究がなされていないのはいかなるものであろうか。長編小説には確かに面白いものはないが、短篇小説にはなかなかよいものがあるし、ことに歴史評伝ともいふべき分野ではそれなりの評価の与えられるべきものが書かれており、文庫にも収められて読者に感銘を与えているので、ツヴァイクは再評価さるべき文学者だと思ひ、あえて本論文を書いてみた。

ツヴァイクの長編小説といえるものは『心の焦燥』"Ingehuld des Herzens" 只一つ、評判は今一つであるが、短篇小説には面白い

ものがいくつもある。第一次大戦中のエピソードをもとに書いた『レマン湖のエピソード (Episode am Genfer See)』や『見えない蒐集 (Die unsichtbare Sammlung)』などツヴァイクの戦争に対する空しさを見事に描いたものがあるが、『庄迫 (Zwang)』は、徴兵を逃れてスイスにいる夫婦に徴兵令が届けられてからの苦悩、心の葛藤を描いているが、彼自身第一次大戦中やや問題のある方法でスイスに逃れ、赤十字で捕虜たちの手紙の本国への送付の仕事を行っていたので、ツヴァイク自身も同様の経験をしたのかもしれない。

しかし、何といっても素晴らしいのは、歴史評伝ともいえるべきジャンルである。前述の『マリー・アントワネット』『マリー・シュテュアルト』の二編以外にも『ジョゼフ・フーシェ』『マゼラン』などがあるが、何といっても最高傑作は『昨日の世界』であろう。これは自伝の形をとりながら、彼の生きた時代をいきいきと(決して客観的とは言えないが)、哀惜の情をもって、ある時は熱っぽく、ある時は押えた筆で描ききっている。ウィーンを追われ異郷で何のメモもなく記憶を頼りに書かれたこの作品は自殺の二年後の一九四四年に出版されたいわば遺書であるが、実際の執筆はその数年前と考えるべきだろう。ここにはコスモポリタンとして、良き時代のヨーロッパを愛し、教養人の形成する静かで平和な世界を希求しながら、結局破れ去った一文人の心の内を切々として述べた

名品というべきであろう。

このジャンルに属するもので本論文で取り上げようとしているのは「権力とたたかう良心——カルヴァン対カステリオン—— (Castellio gegen Calvin oder Fin Geuissen gegen die Gewalt, Herbert Reicher Verlag, Wien)⁽³⁾」である。彼はこれを一九三六年に出版している。この本に対する世上の評価は概してよかったようであるが、それはヒットラーの狂信に対する抗議の書として見られたよう⁽⁴⁾で、そのような意味で各新聞・雑誌は高い評価を与えたと考えられる。確かに当時のツヴァイクを取り囲む政治状況は、教世紀昔の歴史的事件を読者のおかれている現実の状況から判断し、断罪することをよしとする気分があつて、世間もそれを当然として受け入れるのに

何のためらいもなかったのかもしれない。周囲がファナティックになつているとき、一人だけ冷静であることは確かに至難のわざであつたらう。しかし出版以来半世紀以上経過した。このあたりで歴史的事実からこの本を読み返してみるのもそれなり意義をもつだろう。

この本の書かれた頃のオーストリアの状態、それに対するツヴァイク自身の感懐は彼の自伝でもある『昨日の世界』に詳しいが、まず、ヒットラーの行動を年表にしたがって振り返っておきたい。

一九二九年一〇月に始まる世界大恐慌は、第一次大戦の破壊から

ようやく立ち直りかけた国々を直撃したが、第一次大戦の敗者ドイツへの影響は甚大なものであった。殊に、中産階級への打撃は深刻で、彼らはもう既成の政党に失望し、政府・資本家に猛烈な批判を与えていたナチスを支持するようになっていった。一九三二年の総選挙で第一党になったナチスは中央党パーペン・シュライヒャーの後をうけて党首ヒットラーを首相の座に送りこむのに成功した。ナチスの反対派へのテロリズムは容赦なく、三月の総選挙後のポツダムでの新議会の開院式には「八一名の共産党議員は、もはや登壇できなかつた。…彼ら全員、すでに強制収容所、地下、亡命のいずれかの状態だったからである」⁽⁵⁾。このようにして絶対多数になったナチスはブルジョア諸政党とともに、人民・国家の困難を除去するために政府の権限で法律を制定できる授権法を⁽⁶⁾対⁽⁷⁾で通過させ、ドイツ共和国の滅亡を決定的にした。

完全な独裁権を手に入れたナチスは極端な民族主義を唱え、「一九三五年のニュルンベルク法によって最初の(ユダヤ人の迫害)の大きな一歩が踏み出した」⁽⁶⁾。その結果、ユダヤ人は政界・学界・実業界から全面的に追放され、多くの著名人が国外に逃れた。一九三三年にはドイツの再武装を認めない国際連盟に脱退を突き付け、再軍備の道をひた走り、国家改造法で諸邦議會を解散し、中央政府に全権を集中し、翌三四年には大統領職を廃止し、総統職を新設して

自ら就任しドイツ最高の主権者になった。

一方対外関係ではロカルノ条約の破棄、ラインラント進駐とベルサイユ体制をゆすぶり、ゲルマンの大同団結を呼び掛け、オーストリアの併合に突き進んでいった。オーストリアとの合併は平和条約で禁止されており、併合に至るどのような政策も諸国の反対にあつてつぶされていた。政権をとったヒットラーはオーストリアへの介入の機会をうかがっていた。

当時のオーストリアでは第一次大戦での敗戦、ハプスブルク帝国の分裂につぐ政治的・経済的混乱は右翼団体の動きを活発化し、これに対抗する社会民主党は共和国防衛同盟を組織して激しい武力衝突を繰り返した。一九二九年のポーデン・クレディト・アンシュタルトの倒産にはじまる経済界の混乱はオーストリアでも右翼勢力の台頭を促したが、地方選挙ではナチスの急速な進出は目をみはらしめるものがあつた。

一九三二年、右翼勢力をバックに成立したドルフス内閣は翌年クーデターで議會を閉鎖し、共産党を弾圧した。妥協を求める社会民主党に対する右翼からの挑発は、ついに一九三四年二月の社会民主党による全国的大ゼネストとなった。この絶望的抵抗は三百人の死者と与党以外の全政党の解散におわつた。

他方、ドイツにおけるナチスの政権掌握はオーストリアナチス

を元気づけ、各地で武力一揆を繰り返したので、ドルフスは一九三三年六月ナチス党の活動を全面的に禁止した。そこでナチス黨員はドイツに逃れ、オーストリア軍団を結成、国境を越えてオーストリアに干渉せんとした。一九三四年七月二五日暴徒が首相官邸・放送局を襲いドルフスを殺害したが、ムッソリーニがブレンネル峠に軍隊を派遣したため、ヒットラーもそれ以上の介入を断念せざるをえなかった。

しかし、オーストリアの独立の維持はヒットラーの強引な政策（ザール併合、ヴェルサイユ条約の軍事条項破棄、再軍備宣言、ベルリン＝ローマ枢軸の成立）の前にもろくも崩れ、一九三六年七月の独逸協定の締結で反ナチ宣伝の禁止、ドイツ人国家として行動することを約束した。あとはヒットラーの強引な武力を背景にした。オーストリア併合政策はオーストリア人の独立維持の願望を一気におしつぶし三七年三月のドイツ軍の無血進駐・併合へと進んでゆく。

『昨日の世界』には一九三四年二月の社会民主党によるウィーンでの暴動およびその頃のドイツ・オーストリアの状況がツヴァイク自身の見聞をもとに描かれている。リヒアルト・シュトラウスの作品の上演禁止の事情がかなり詳しくのべられたあと、ザルツブルク

のツヴァイク家が『武器隠匿』の疑いで家宅搜索されたことを押え切れない怒りをもって述べている。もうすでに前年から、ユダヤ人であるツヴァイクを避ける友人がいたりして、オーストリアの状況が悪化しているのを感じていたが、この家宅搜索も治安当局の『何人にも断固とした処置をとるぞ』とのデモンストレーションを、もっとも反撃の恐れのないツヴァイクに対して行なうことによって、ナチスの暴虐に反感を抱く国民へのザルツブルク警察所長のせめてもの存在証明であった。この背後に、オーストリアにおける状況が、如何に深刻になったか、ドイツからの圧力が如何に強大なものとなったかをひしひしと感じたツヴァイクは、その夜のうちに荷物をまとめ、ザルツブルク市当局に『自分の住所を決定的に捨てた』と通告してロンドンへ旅立った。亡命の旅の第一歩である。

この年に出版されたのが『エラムスムの勝利と悲劇 (Triumph und Tragik des Erasmus von Rotterdam)』である。『昨日の世界』のなかでツヴァイクは、『ヒューマンストのひとつの精神的肖像画を試みた』とこの書物執筆の目的を述べているが、それに引き続いて『彼エラムススは、職業的世界改善たちよりも明瞭に時代の愚劣さを理解しているが、悲劇的にも、あらゆる彼の理性をもってしても時代の愚劣さを妨げることができなかった』と記している。『昨日の世界』が自殺の前年に執筆されているので、この文章は、何の抵抗

もできず、南米まで根なし草のように流れてきた自らの姿を眺めた末に記されたものとするべきだろう。ツヴァイクにエラスムスを書かせたのは、作家で当時はツヴァイクの妻であったフリーデリーケであった。彼女はツヴァイクの伝記を書いているが、それによるとツヴァイクがヨーロッパの行く末に悲観的になっていたとき、ホイジンガーの『エラスムス』をツヴァイクに教えた。それは思考方法がエラスムスとツヴァイクとは酷似していると彼女が考えたからである。ツヴァイクはエラスムスの伝記で『一時的に敗北するが永遠の勝利をつかむ精神』を描いてみようとした。だからこそ『この哲学者を描くなかで、ツヴァイクは自らの立場を公に宣言したのみならず、テロのイデオロギーに反対する感情を強めて行くことができた。さらに、歴史の原則によって、民衆の熱狂さを攻撃することによって、ドイツの読者を取り囲んでいるますます強まってきている重臣に風穴をあけられたらと考えた』⁽⁸⁾。

ツヴァイクはおよそ派手なエピソードのないエラスムスを取り上げ、今はもう忘れ去られてしまった『教養人の一大同盟』の盟主に値する最大の評価を与える。『だからまづ明確に、要約して云っておくべきだろう——この偉大な忘れられた人、ロツテルダムのエラスムスを今日なお、いや今日こそ、われわれにとつて貴重な存在にするゆえんのもの、すなわち彼が西欧のあらゆる著作家や劇作家

のなかで最初の自覚したヨーロッパ人、最初の戦闘的な平和愛好者であり、人文主義的な理想、世界と精神にくみする理想のためのもっとも雄弁な代言者であったということ』⁽⁹⁾。かくしてエラスムスは全ヨーロッパの『教養の帝国の市民』になろうとする人々、上は皇帝・教皇から芸術家・政治家・一般人までを引き付けるに至った。この意味でエラスムスは『勝利』を博した。この帝国ではラテン語が共通語になり、一国民の繁栄ではなく全人類の福祉が理想主義のもとに集まった人々の目標となった。

渡辺一夫の『フランス・ユマニスムの成立』でルネサンス期の人文主義者の特長を「人間を歪める教会の制度や慣習及び硬化した神学者たちの言動に対して『これはキリストと何の関係があるのか』と訊ねかけたと伝えられる」と的確に表現しているが、エラスムスも自己の持つ特技、古典語の知識を使ってキリスト(教)との関係を訊ね、次第に物の本質を探っていった。その線上には新たにギリシャ語から翻訳された新約聖書の刊行(一五一五)があるが、彼をヨーロッパ人文主義の世界で主たらしめ、一躍ヨーロッパ世界の中心人物におしあげ、そのために後半生を悲劇の淵にたたきこんだものは、彼の親友トーマス・モアの許で「七日のうちに、しかも文字通りもっぱら気散じのために」作った『痴愚神札賛』がある。周知の如く痴愚(女)神を登場させて、ソフォクレスの「無知のうちに

あつてのみ、人生は快適なのだ」を証明する過程でありとあらゆる人々を登場させて、どの人も如何にそれぞれの妄想をもって生きているかを思いっきりの風刺で描き、結論として、「およそ人間は、盲目的にその情熱にすがればすがるほど、非理性的に生きれば生きるほど、幸福」だと主張している。

だが「この書物のおごそかな仮面技術によって、その真の意図を欺かれてはならない。この見たところ道化じみた『痴愚礼賛』は、その謝肉祭の仮面のうらでは、当時の最も危険な書物の一つだった。今日われわれが単に才知あふれた花火のように見なしているものも、事実はドイツの宗教改革に道をきり開いた爆薬なのであった」。エラスムスは「教皇庁の罪状目録を公式に時代の壁に釘づける。痴愚（女）神の冗談はいつの間にか、真剣な時代批判になり世間の人たちが感じてはおり、心に抱いてはいるが、口には出せなかったカトリック教会の墮落に対する決定的攻撃がその口からもれた。ひそかに隠れて行なわれる批判よりは、公然と、痴愚（女）神の口を借りて、時代の精神たるエラスムスの行なう批判は、問題点を余すことなくえぐりだした。

エラスムスは教会を批判するが、決して破壊しようとはしなかった。痴愚（女）神は批判し、風刺する。それだけで、それ以上の行為はしない。だからといって、エラスムスの果たした役割を軽視し

てはならぬ。重要なのはカトリック教会に痛烈な批判を加えているためでなく、その批判の基準がキリスト教の本質的な物からなされているからであった。このキリスト教の本質を求める点でルターと共通している。エラスムスが放った矢で、痛手を被った教会に、ルターは一步踏み出して決定的な打撃を与えた。エラスムスはそれまでだれもなしえなかった公然たる批判はした。が決して具体的に教会を破壊しようとはしなかった。エラスムスが執らない方法を追い詰められたにしても執ったのがマルティン・ルターであった。だから「エラスムスが生んだ卵をルターがかえした」と世上では言われた。本質をついているといえるだろう。

だからこそ、カトリック教会が形式的にしろ僧籍にあるエラスムスに、教会への忠誠をもとめるのは当然だが、それに対してエラスムスは言を左右にはぐらかそうとする。一方福音派にもくみしない。その結果は左右から「憎悪と嘲笑」が降り注ぐことになる。それでも彼はどの党派にも属さず、ひたすら未来を夢みて耐える。決して自己の考えを貫くために耐えるのではない。ただ、耐えるだけである。それは「不決断、あるいはむしろ決断したがらぬ態度」であり、「同時代および後世の人々はきわめて単純に臆病と呼ぶ」ようなおよそヨーロッパに君臨した人文主義のリーダーと称えられた人のとるべきとも思われない態度をとりつづけるのである。ドイ

ツの破滅を恐れる皇帝カール五世は、仲介者としてエラスムスを国会(ヴォルムスとアウグスブルク)に招待する。この世界史的な瞬間にさえも決断を避ける行為には「歴史的責任」が生れる、とツヴァイクはいらだたしげにエラスムスを断罪している。

本題から離れた『エラスムスの勝利と悲劇』に深入りしすぎたようだが、ツヴァイクがエラスムスの悲劇と指摘した点はそのまま、ツヴァイクの悲劇としてそっくり戻ってくる。フリーデリーケがエラスムスとツヴァイクの思考方法は似ていると言ったのは正に正鵠をえている。

この『エラスムスの勝利と悲劇』を出版した時、ツヴァイクはロンドンに小さなアパートを借りて滞在していた。一九三四年二月末『ただの旅客としてではなく、…どれだけの期間住むか分からず』にヴィクトリア駅に降り立ったときの感慨は『昨日の世界』を読む者にもろに伝わってくる。だがまだこのときは自らの意志で祖国を捨てた人間であった。⁽¹¹⁾

注

(1) 日本で唯一人のツヴァイク研究者である飯塚信雄氏はその著書『ヨーロッパ教養世界の没落』(昭和四二年 理想社)で繰り返し、ツヴァイクを二流と評価しておられる。が「ツヴァイクについての評論は…その数が意外にすくない。同時代に活躍

した彼の友人たち…に比べれば全然比較にならない位のものである」(同書三頁)とも述べられている。

(2) かつて角川文庫には五冊収められていたが、そのうちの二冊は歴史評伝のジャンルに属すべき『人生の星のとき』だから四冊というべきだろう。

(3) 英訳が同年に出ている。The right to heresy, Cartellion against Calvin, tr. by Eden and Cedar Paul (N. Y. Viking Press)

(4) Book Review Digest 1936 によると12の新聞・雑誌にとりあげられ、Nation, New York Times の批評は好意的であるとの記号がつけられている。

(5) セバステイアン・ハフナー著『ドイツ帝国の興亡』(山田義顯訳)二一六頁

(6) ハフナー：前掲書二四六頁

(7) Fridenke Zweig・Stefan Zweig (N. Y. 1946) p. 156.

(8) Fridenke Zweig, op. cit. pp. 156~162.

(9) ここに述べられている「自覚したヨーロッパ人」という考え方がツヴァイクを理解するキーワードになる。第一次大戦でもう失われてしまった「自覚したヨーロッパ人」で構成されるヨーロッパを相愛わらず追い求めていったことが、歴史的現実とのズレを大きくし、ついに自殺でしか解決できなくしてしまっ

たと考えて良いだろう。この点に関しては飯塚信雄教授の『ヨ

ロッパ 教養世界の没落』を参照。

(10) 岩波書店昭和三十三年九頁

(11) 一九三八年オーストリアの崩壊によってツヴァイクの旅券は失効し、かれはイギリス当局から無国籍者旅券を交付されるが、その時のツヴァイクの感情は誠に胸をうつものがある。

— 西洋文化講座教授 —